

2024年3月24日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ40「憎しみを乗り越えて」

箴言25：21～22、マタイ5：43～48

問105第六戒で、神は何を望んでおられますか。

答 わたしが、思いにより、言葉や態度により、ましてや行為によって、わたしの隣人を、自分自らまた他人を通して、そしったり、憎んだり、侮辱したり、殺してはならないこと。かえってあらゆる復讐心を捨て去ること。さらに、自分自身を傷つけたり、自ら危険を冒すべきではない、ということです。そういうわけで、権威者もまた、殺人を防ぐために剣を帯びています。

問106しかし、この戒めは、殺すことについてだけ、語っているではありませんか。

答 神が、殺人の禁止を通して、わたしたちに教えようとしておられるのは、御自身がねたみ、憎しみ、怒り、復讐心のような殺人の根を憎んでおられること。またすべてそのようなことは、この方の前では一種の隠れた殺人である、ということです。

多くの人々は、心に思うことは許される、自由ではないかと考えます。確かに思うだけで、行為に至らないならば、誰にも危害を加えないのであって、それならよいのではないか。それは、見えない神さまを信じていない無神論的な考え方です。山上の説教でイエスさまは「隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」(マタイ6：6)と言われます。表面に現れない隠れた部分、そこがすでに問題なのであって、神さまはそこを見ておられます。信仰問答は、殺人という具体的な行為よりも、むしろその行為に至る前の心の動き、人間の感情、内面の問題を取り上げていることに気付かされます。さらには問106では、そのような心の動きを「殺人の根」と言い、またそれが神さまの御前では「一種の隠れた殺人である」と言います。その殺人の根を摘み取ることを信仰は問題にしています。

では、その殺人の根はどこから生じてきたのでしょうか。信仰問答では問7のところで次のように告白しています。「わたしたちの始祖アダムとエバの、楽園における墮落と不従順からです。それで、わたしたちの本性はこのように毒され、わたしたちは皆、罪のうちにはらまれて生まれてくるのです」アダムとエバから始まって、もうすでにわたしたちはこのような罪に毒されているという衝撃的な事実を突きつけられます。パウロは「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです、すべての人が罪を犯したからです」(ローマ5：12)と述べています。罪の侵入、死の侵入があります。誰もそれから免れることはできません。聖書は、創世記のアダムとエバの物語に続けて、その子どもたちカインとアベルに起こった人類最初の殺人という悲劇を伝えています。罪が入り、そして死が入り込む。これは神さまの御前に罪を犯したことの当然の帰結として起こったことでありました。そしてこの時に弟を殺したカインが抱いた感情こそ、信仰問答が殺人の根としてあげられているねたみ、憎しみ、怒り以外の何ものでもありません。

「殺してはならない」誰もがわかっていることです。でもこれがなくなならない。戦争が続いています。痛ましいテロが起こります。身近なところでも毎日のように人の命が奪われるニュースがあります。いじめの問題、過労死の問題もそうでしょう。利益追及で命が軽んじられる現実があります。死刑や安楽死、中絶など、命に関わる様々な事柄について、わたしたちはあまりにも無頓着であり、他人事であります。そして問題なのは、これを放置してしまうか、表面

的に取り繕うことで誤魔化してしまうのです。その結果、今日の戦争もそこに残るのは憎しみ、怒り、復讐心です。そして報復の連鎖が起こります。それは表面的、人間的な解決だからです。やられたらやり返す。やられる前にやる。そういう知恵しか働かない。人類はそういう堂々巡りを繰り返してきました。そこに人間の限界があります。

しかしその限界を突破して、その殺人の根を摘み取るのが神さまの救いです。なぜ神さまの独り子が十字架の死を受けられたのか。イエスさまはファリサイ派や律法学者など、当時の宗教的な指導者たちの妬みや憎しみをかけておりました。イエスさまの方が正しいからです。でもその正しさを曲げて、人間の思いを通した。その行き着くところが十字架でした。けれどもイエスさまはその妬み、憎しみを裁かれるのではなく、黙ってそれを引き受けられました。そして十字架の死をお引き受けくださったのです。それはそのわたしたちのねたみ、憎しみ、怒りを全部担われ、その殺人の根をご自身の命を持って摘み取るために他なりません。そしてそれだけではありません。イエスさまは三日目によみがえられました。この罪の根、殺人の根を摘み取り、そこに新しい命を芽生えさせてくださった。それがわたしたちの新しい生き方を可能にします。その新しい生き方を次の問答が示しています。

問107 しかし、わたしたちが自分の隣人をそのようにして殺さなければ、それで十分なのですか。

答 いいえ。神はそこにおいて、ねたみ、憎しみ、怒りを断罪しておられるのですから、この方がわたしたちに求めておられるのは、わたしたちが自分の隣人を自分自身のように愛し、忍耐、平和、寛容、慈愛、親切を示し、その人への危害をできうる限り防ぎ、わたしたちの敵に対してさえ善を行う、ということなのです。

「殺してはならない」という戒めについて、信仰問答はただ殺さなければいいということではなく、むしろ隣人を愛し、忍耐、平和、寛容を示し、善を行うという積極的な生き方へとわたしたちを押し出しています。それはイエスさまに結ばれ、その十字架とよみがえりの御業によって殺人の根を摘み取っていただいた、そしてよみがえりの命にあずかせていただいた者に与えられている新しい命に他なりません。

人間関係の中で妬み、憎しみに支配されてしまうことがあります。けれども恐れることはありません。イエスさまが十字架でその妬みを、憎しみをすべて負ってくださいました。十字架でこれを打ち砕いてくださいました。だからわたしたちはこの殺人の根に支配されることはありません。それどころか妬みを乗り越え、憎しみを乗り越えて、愛に生きる新しい命をすでに与えられています。その命をすでに生き始めているのです。来週はイースターを迎えます。この罪と死に勝利し、新しい命を賜る神さまの救いを共に祝いましょう。

天の父よ。わたしたちの心を支配する妬み、憎しみ、怒り、その殺人の根を摘み取ってくださるために、主はこの世に来られ、十字架の死をお受けになられました。そしてよみがえりの命をもって憎しみではなく愛に生きる者へと新しく造り変えてくださることを感謝いたします。どうぞ愛を持って仕え、人を生かす歩みへと進ませてください。主の御名によって祈ります。アーメン。